

**[B年] 受難節第1主日(2026年2月22日)****【旧約聖書日課】 エレミヤ書 31章27～34節**

27見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家に、人の種と動物の種を蒔く日が来る、と主は言われる。28かつて、彼らを抜き、壊し、破壊し、滅ぼし、災いをもたらそうと見張っていたが、今、わたしは彼らを建て、また植えようと見張っている、と主は言われる。

29その日には、人々はもはや言わない。

「先祖が酸いぶどうを食べれば、子孫の歯が浮く」と。

30人は自分の罪のゆえに死ぬ。だれでも酸いぶどうを食べれば、自分の歯が浮く。

31見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。

32この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。33しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。34そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

**【使徒書日課】****ヘブライ人への手紙 2章10～18節**

10というのは、多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創始者を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の目標であり源である方に、ふさわしいことであったからです。11事実、人を聖なる者となさる方も、聖なる者とされる人たちも、すべて一つの源から出ているのです。それで、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、

12「わたしは、あなたの名を

わたしの兄弟たちに知らせ、  
集会の中であなたを賛美します」。

と言い、13また、

「わたしは神に信頼します」。

と言い、更にまた、

「ここに、わたしと、

神がわたしに与えてくださった子らがいます」。

と言われます。14ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、15死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。16確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハムの子孫を助けられるのです。17それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。18事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです。

**【福音書日課】****マルコによる福音書 1章12～15節**

12それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した。13イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。

14ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、15「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## エレミヤ書31章27～34節

27その日が来る——主の仰せ。私はイスラエルの家とユダの家に、人の種と動物の種を蒔く。28かつて、引き抜き、壊し、破壊し、滅ぼし、災いをもたらすために彼らを見張っていたが、同じように、建て、植えるために彼らを見張る——主の仰せ。

29その日には、人々はもはや

「父が酸っぱいぶどうを食べると

子どもの歯が浮く」とは言わない。

30人は自分の過ちのゆえに死ぬのだ。酸っぱいぶどうを食べる人は、誰でも自分の歯が浮く。

31その日が来る——主の仰せ。私はイスラエルの家、およびユダの家と新しい契約を結ぶ。

32この契約は、それは、私が彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に結んだ契約のようなものではない。私が彼らの主人であったにもかかわらず、彼らは私の契約を破ってしまっ——主の仰せ。33その日の後、私がイスラエルの家と結ぶ契約はこれである——主の仰せ。私の律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心に書き記す。私は彼らの神となり、彼らは私の民となる。34もはや彼らは、隣人や兄弟の間で、「主を知れ」と言って教え合うことはない。小さな者も大きな者に至るまで、彼らは皆、私を知るからである——主の仰せ。私は彼らの過ちを赦し、もはや彼らの罪を思い起こすことはない。

## ヘブライ人への手紙2章10～18節

10というのは、多くの子たちを栄光へと導くために、彼らの救いの導き手〔別訳→創始者〕を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の存在の目標であり源である方に、ふさわしいことであったからです。11実際、聖とする方も、聖とされる人たちも、すべて一つの源から出ているのです。それゆえ、イエスは彼らをきょうだいと呼ぶことを恥としないで、

12「私は、きょうだいたちに

あなたの名を告げ知らせ

集会の中であなたを賛美します」

と言い、13また、

「私は神に信頼する」

と言い、さらにまた、

「見よ、私と

神が私に与えてくださった子たちがいます」

と言われます。14そこで、子たちは皆、血と肉とを持っているので、イエスもまた同じように、これらのものをお持ちになりました。それは、ご自分の死によって、死の力を持つ者、つまり悪魔を無力にし、15死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた人々を解放されるためでした。16確かに、イエスは天使たちを助ける〔直訳→引き受ける〕のではなく、アブラハムの子孫を助けられるのです。17それで、イエスは、神の前で〔直訳→神の事柄について〕憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を宥める〔別訳→贖う〕ために、あらゆる点できょうだいたちと同じようにならなければならなりません。18事実、ご自身、試練を受けて苦しめたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです。

## マルコによる福音書1章12～15節

12それからすぐに、霊はイエスを荒れ野に追いやった。13イエスは四十日間荒れ野にいて、サタンの試みを受け、また、野獣と共におられた。そして、天使たちがイエスに仕えていた。

14ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、15「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」と言われた。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・2月22日「受難節第1主日」の日課主題は「荒れ野の誘惑」。「受難節」は、「復活日(イースター)」の前に40日+6主日の期間で定められてきた。「40日」は、主イエスが荒れ野で誘惑を受けられた期間に習ったもので、この期節は「四旬節」とも称される。

・旧約日課は、「エレミヤ書」から、「新しい契約」の約束が告げられる預言の箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、「救いの創始者」としてのイエスの「人性」を明示する箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、四十日間荒れ野で誘惑を受けられたことを伝える箇所。

**旧約日課(エレミヤ 31 章より)**

・「エレミヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「後の預言者」の第二に置かれている預言文書。前7世紀～6世紀の南王国ユダの最末期に三人の王(ヨシヤ、ヨヤキム、ゼデキヤ)にエルサレムで仕えた宮廷預言者「エレミヤ」の預言句集および預言活動記録が収録されている。その活動期間は、標題(1:1~3)によれば、前628年頃から前587年頃のエルサレム陥落までとなるが、前587年以降とみなせる内容(40~44章)も含まれている。

・日課箇所の預言は、30~31章にわたって一つのまとまりをなすもので、「イスラエルとユダの回復」を約束する「新しい契約」が告げられた内容となっている。この預言章句は、29章でエレミヤがバビロンの捕囚民に向けて手紙を書き送ったという叙述の枠の延長上に置かれており、捕囚民に向けて告げられた預言とみなすことができる。29:1~3によれば、前598年頃、ヨヤキム王の時代の最後にバビロン王ネブカドネツアル軍の包囲戦に降伏してヨヤキム王の代わりに即位したばかりのヨヤキン王(=エコンヤ王)をはじめとするエルサレム宮廷のおもだった者たちがバビロンに移送されていった後のことで、エルサレムにはヨヤキン王に代わって建てられたゼデキヤ王の宮廷が残されていた時代のことである。標題(1:1~3)にあるように、エレミヤは、ヨヤキム王に仕えた後、捕囚王となったヨヤキン王に仕えずに、エルサレム残留王となったゼデキヤ王に仕える立場になり、その立場からバビロン捕囚民に助言を告げている。そのころにバビロンの地で祭司任命を受け「預言者」としての活動を始めたと考えられるのが「エゼキエル書」の「祭司ブジの子エゼキエル」で、彼は同地で捕囚王「ヨヤキン」に仕える立場で預言を告げている(同書参照)。おそらく、バビロン王ネブカドネツアル王によってエルサレムとバビロンに分断されたユダ王国宮廷の両者を連携させる意図でエレミヤやエゼキエルらの預言者グループが書簡等によって連絡を図っていたのだろう。

・日課箇所29節のことわざは、エゼキエル書18:2にも引用されており、このことわざがエルサレムで広く人口に膾炙していた背景が推認される。

・「イスラエルの家」と「ユダの家」が並んで繰り返し取り上げられているように、両者は区別されている。「イスラエルの家」は、サマリアを都とする北王国「イスラエル」の枠組みを形成していた北部諸部族を指し、「ユダの家」は、エルサレムを都とする南王国「ユダ」の枠組みを形成していたユダ族、ベニヤミン族を指すと推認される。聖書正典は、両者が共通のルーツを持ち、ダビデ王およびソロモン王の時代には統一王国を形成していたが、ソロモン王没後の時代に南北に「分裂」したと描いているが、歴史的には、両者が共通のアイデンティティを保持していたとは考え難く、北王国滅亡後(前721年頃以降)の社会変化に伴って南王国ユダが滅亡した北王国イスラエルの正統な継承者として名乗りを上げるようになった、というのが実際に起こったことと考えられる。この「イスラエル」と「ユダ」を統合していくという政治目標は、おそらくヨシヤ王(在位=前640~609年頃)の時代に覇権国アッシリアが急速に権勢を失っていく中で着手され、その正当性をエレミヤら預言者に主張させていたと考えられる。「エレミヤ書」では、3:18に子の政治目標を告げる預言が置かれている。

**使徒書日課(ヘブライ 2 章より)**

・「ヘブライ人への手紙」は、「パウロ書簡集」に続く位置に置かれた書簡文書。この文書の歴史上の扱われ方や新約における位置づけについては、前週資料「聖書と祈りの会 260211」を参照。

・日課箇所は、本書が本論で「贖罪神学」を展開する前提として、イエスの「人性」を明示する内容となっている。イエス・キリストの「神性」と「人性」をめぐる神学論争は、5世紀に至るまで続き、「カルケドン信条」(451年カルケドン公会議)で一応の決着を見た問題である。この「カルケドン信条」は、「イエス・キリストは…真の神であり…真の人間である」としているが、これを明瞭に示す聖書典拠があるわけではない。新約諸文書では、「共観福音書」や「パウロ書簡集」が人間としての主イエスに何ら疑義を持たずにいる一方で、「ヨハネ文書」などでは主イエスの人間性を敢えて確認しようとする叙述が見られ、初期教会において主イエスの「神性」が強調されるようになる過程で極論などによる混乱が生じていたことが推察される。本書日課箇所も、同様の背景の中で、主イエスの「人性」を明確にしておく必要に迫られて述べられていると考えられるが、それは、本書の本論展開で主イエスの「神性」に重心を置いた主張がなされることに対してあらかじめバランスを取ろうとしているものと考えられる。

・10節「救い(ソーテリア)の創始者(アルケーゴス)…完全な者とされた(トレイオーサイ)」という表現は、12:2「信仰(ピステイス)の創始者(アルケーゴス)また完成者(トレイオーテース)」に対応する。「創始者」と訳されている「アルケーゴス」の原義は「先導者」。「使徒言行録」(3:15、5:31)では、「導き手」の訳語。

## 福音書日課(マルコ 1 章より)

・日課箇所は、主イエスの「荒れ野の誘惑」を伝える箇所、共観福音書が共通して伝えているが、「マタイ」および「ルカ」が「サタン／悪魔」との神学的対話を伝えているのに対して、「マルコ」はそれを伝えていない。

・この出来事を叙述するに際して、「マルコ」は、誘惑する者を「サタン(サタナース)」として提示しているが、「ルカ」は一貫して「悪魔(ディアボロス)」とし、他方で「マタイ」は「悪魔(ディアボロス)」、「誘惑する者(ペイラゾーン)」、「サタン(サタナース)」を併用している。「サタン(サタナース)」は、旧約正典で「サタン」(ヨブ 1~2 章など)または「妨げる者」(民 22:22 など)と訳されるヘブライ語「サターナ」の音訳。旧約の「サタン(サターナ)」は、神の御使いの一種として描かれており、神に敵対する存在ではない。しかし、新約で用いられる「サタン」は、神に敵対する存在であるかのように描かれている場合がある。旧約の本来の神学思想は「神の支配」に基づく一元論的世界観を基本にしていると考えられるが、前 6 世紀以降、ユダヤ教世界を含めたオリエント世界全体にペルシア宗教由来の善悪二元論的世界観が影響を及ぼすようになり、「神」の陣営とそれに対抗する「悪」の陣営を世界理解の前提にするような叙述が新約でも見られる。これがどの程度自覚的なものなのか、あるいは影響はあっても原則的には旧約的世界観を維持しているのか、各書により相違があり、判断は難しい。「マルコ」について言えば、「サタン」の用例が繰り返し見られる一方で、「悪魔(ディアボロス)」の用例は見られず、敢えて「サタン」を用いることで旧約の「サタン」観を意識的に示しているとも考えられる。

・「マルコ」の特徴となっているのが 13 節後半「その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた」という叙述。「野獣(テェリオン)」は、使徒書や黙示録では用例が見られ、特に黙示録では神に敵対する存在を象徴するものとして描かれるが、他の福音書では用例がない。「マルコ」が「野獣」をどのような意味で用いているのか、他に用例がないので判断が難しいが、使徒書や黙示録の用例を踏まえれば、「神に敵対する者」を想定することになる。「天使たち」に関しては、「マタイ」が「四十日」の後に「悪魔」が離れ去ってから「天使たちが来てイエスに仕えた」としており時期が一致しない叙述をしている。「マタイ」は、「四十日の誘惑」を終えられた主イエスの公生涯の活動が「悪魔」に左右されたものではなく「天使」に支えられたものであったことを示そうとしているのに対して、「マルコ」の主眼は、「野獣と一緒にいる」ことと同時に「天使たちが仕えている」ことにあると考えられる。

・「天使」と「サタン」が並んで現れる箇所として、8:31~38 の受難予告の箇所も参照。

来週の誕生日 (2 月 22 日~28 日)

## 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-294「ひとよ、汝が罪の」(= II 99 番)は、16 世紀宗教改革期のドイツの音楽家ハイデンガルトの説教に影響されて作った詞で、原詞は 22 節で構成された受難物語を歌う詞だが、讃美歌集には 1 節と最終節が採用されてきた。曲は、同時期の音楽家グライターの作で、1525 年発行の詩編歌集に詩編 36 編のための曲として作曲。
- ・21-284 番「荒れ野の中で」は、受難節の讃美歌として英米の讃美歌集で広く採用されている。作曲は、19 世紀インド生まれの聖職者スミタンとなっているが、フランシス・ポットが大幅に改作した詞が広く用いられている。
- ・21-501「主よ、私たちは祈ります」は、『讃美歌 21』編纂のために公募されて収められた日本人の作詞作曲による新しい讃美歌。作詞は中学英語教師であった深沢秋子で、429 番も作詞。
- ・21-288「恵みにかがやき」は、19 世紀英国でブレザレン派の団体に所属したアイルランド出身の信徒エドワード・デニーが「千年至福説(ディスペンセーション主義神学←契約神学の対極に位置づけられる)」に基づいて作詞。曲は、19 世紀英国の教会音楽家 W.ハヴァガルの原曲を米国の教会音楽家 L.メーソンが編曲したもの。

## 21-294「ひとよ、汝が罪の」

## O Mensch, bewein dein Sünde gross

1. O Mensch, bewein dein Sünde groß, / darum Christus seins Vaters Schoß / äußert' und kam auf Erden; / von einer Jungfrau rein und zart / für uns er hier geboren ward, / er wollt der Mittler werden. / Den Toten er das Leben gab / und tat dabei all Krankheit ab, / bis sich die Zeit herdrange, / dass er für uns geopfert würd, / trüg unsrer Sünden schwere Bürd / wohl an dem Kreuze lange.
2. So lasst uns nun ihm dankbar sein, / dass er für uns litt solche Pein, / nach seinem Willen leben. / Auch lasst uns sein der Sünde feind, / weil uns Gotts Wort so helle scheint, / Tag, Nacht danach tun streben, / die Lieb erzeigen jedermann, / die Christus hat an uns getan / mit seinem Leiden, Sterben. / O Menschenkind, betracht das recht, / wie Gottes Zorn die Sünde schlägt, / tu dich davor bewahren!

## 21-284「荒れ野の中で」

## Forty days and forty nights

1. Forty days and forty nights / you were fasting in the wild; / forty days and forty nights / tempted, and yet undefiled.
2. Shall not we your sorrow share / and from worldly joys abstain, / fasting with unceasing prayer, / strong with you to suffer pain?
3. Then if Satan on us press, / flesh or spirit to assail, / victor in the wilderness, / grant that we not faint nor fail!
4. So shall we have peace divine: / holier gladness ours shall be; / round us, too, shall angels shine, / such as served you faithfully.
5. Keep, O keep us, Savior dear, / ever constant by your side, / that with you we may appear / at the eternal Eastertide.

## 21-288「恵みにかがやき」

## What grace, O Lord, and beauty shone

- 1 What grace, O Lord, and beauty shone / around Your steps below! / What patient love was seen in all / Your life and death of woe!
- 2 For ever on Your burdened heart / a weight of sorrow hung, / yet no ungentle, murmuring word / escaped Your silent tongue.
- 3 Your foes might hate, despise, revile, / Your friends unfaithful prove; / unwearied in forgiveness still, / Your heart could only love.
- 4 O give us hearts to love like You, / like You, O Lord, to grieve / far more for others' sins than all / the wrongs that we receive.
- 5 One with Yourself, may every eye / in all of humankind / behold that grace and gentleness / which, Lord, in You we find.

